切手が語る医学(No.270)
【赤十字切手④】

東区・紫南支部　古庄 弘典

赤十字切手
フランス(1971年)

ジャン・バチスト・グルーズ Jean Baptiste Greuze(1725-1805)は，非常に早くから画家を志し，ほとんど独力で世に出た。

この時代には，芸術は，啓示や歴史，神話，宗教的な大きなテーマから遠ざかり，精神的な頂上をも早めきすことなく，彼も現実的な美しいものに下りてきていた。批評家は，グルーズの画，田園の家族の光景や無邪気な村民の描写が，いつも日常の現実の表現であるとして，指摘している。

この切手の絵に見られるように，グルーズは，ワットーやブーシェールが愛着していた衣服の波立ちを無視して，形の起伏に，特に顔の表情に，感激的な主題によって容易に動かされた魂の反応を描いたのである。しかし，優しそうに傾けている頭，無邪気に裸わにした腕の動きは，恐らく憐れみの感情の表現が，願っている以上の官能を包みかくしている。

赤十字切手
フランス(1971年)